

先週は 10 章 1~11 節を通して、エフーによって、アハブの生きる子孫たちに対して、容赦のない対応をみました。

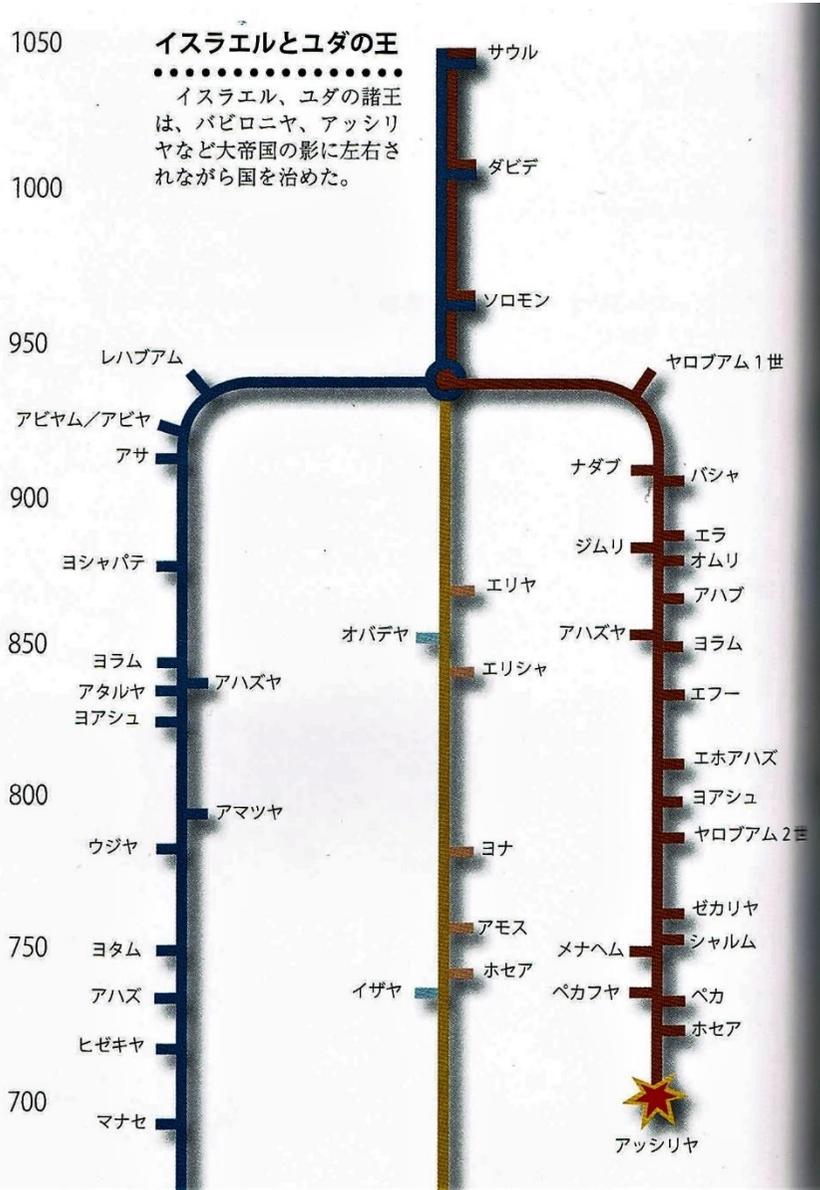
本日は説教者である梶川が入院ということになり、大変恐縮ではありますが、文書を代読していただくという方法にしたいと思います。ご理解をたまわるようお願い申し上げます。

1. アハズヤの親族をいけどりにし (12~14 節)

- ①サマリヤのベテ・エゲデ (12) 「それから、エフーは立ってサマリヤへ行った。彼は途中、羊飼いのベテ・エゲデという所にいた。」
エフーが向かった先は、北のもう一つの要所であるサマリヤでした。エフーは途中で、ベテ・エゲデという所に滞在していました。
- ②アハズヤの身内の者たち (13) 「その間にエフーはユダの王アハズヤの身内の者たちに出会った。彼が『あなたがたはだれか』と聞くと、彼らは、『私たちはアハズヤの身内の者です。王の子どもたちと王母の子どもたちの安否を気づかって来たのです。』」
その間にエフーが出会ったのは南王国ユダであったアハズヤの身内の人々でした。「私たちはアハズヤの身内の者です。王の子どもたちと王母の子どもたちの安否を気づかってきたのです。」と堂々と述べました。敬意を払ってくれることがあったとしても、次のような結果となるとは、誰も思ってもいなかったことでしょう。
- ③生けどりにし (14) 「エフーは、『彼らを生けどりにせよ』と言った。それで人々は、彼らを生けどりにした。そして、ベテ・エゲデの水のためのところで、彼ら四十二人を殺し、ひとりも残さなかった。」
ところがなんと、エフーは「彼らを生けどりにせよ」と命じたのです。そして、ベテ・エゲデの水のためのところで、そのアハズヤの親族 42 人を殺し、ひとりも残すことがなかったのです。

2. エフーとヨナダブ (15 節)

- ①ヨナダブ (15) 「彼がそこへ去って行くと、彼を迎えに来たレカブの子ヨナダブに出会った。」
エフーがサマリヤを去って行くと、彼を迎えにいる人がいました。レカブの子ヨナダブでした。イスラエルの保守的なグループのリーダーでした。
- ②両者の挨拶 (15) 「エフーはあいさつして言った。『私の心があなたに結ばれているように、あなたの心もそうですか。』ヨナダブは『そうです』と答えた。」
エフーはあいさつしました。考え方に通ずるところがある、ヨナダブに対しては友好的です。「私の心があなたに結ばれているように、あなたの心もそうですか。」。ヨナダブも、迎えにきたぐらいですから、「そうです」と応えました。



- ③ヨナダブを戦車へ (15) 『『それなら、こちらに手をよこしなさい。』ヨナダブが手を差し出すと、エフーは彼を戦車の上にひきあげて、エフーは「それなら」と友好のしるしとして、手を差し出します。そして、エフーが乗る戦車の上に引き上げたのです。

3. 主のことばのとおり (16~17 節)

- ①私といっしょに来て (16) 『『私といっしょに来て、私の主に対する熱心さをみなさい』と言った。ふたりは彼の戦車に乗って』
エフーは友好の気持ちをさらにあらわします。「私といっしょに来て、私の主に対する熱心を見なさい」。エフーはヨナダブならば、自分の主に対する熱心の意味がわかってくれると思ったのでしょう。ふたりは、エフーの戦車に乗って進んだのです。
- ②アハブに属する者を (17) 「サマリヤに行った。エフーはアハブに属する者で、サマリヤに残っていた者を皆殺しにし、その一部を根絶やしにした。」
エフーはもう一度サマリヤに、ヨナダブを連れて入ったのです。彼がヨナダブに見せたかった主への熱心とは何だったでしょう。エフーはアハブに属する者たちで、残っていた者たちを皆殺しにし、その一部を根絶やしにしたのです。
- ③エリヤを通して告げられたとおり (17) 「主がエリヤにお告げになったことばのとおりであった。」
第一列王記 21 章からは、何度も引用してきましたが、20~21 節において、預言者エリヤはアハブにこう言っています。「あなたが裏切って主の目の前に悪を行ったので、わたしはあなたにわざわいをもたらす。わたしはあなたの子孫を除き去り、アハブに属するこわっばも奴隷も、自由の者も、イスラエルで断ち滅ぼす。」この預言が実現したということです。

《結論》

イスラエルの王となったエフーについては、霊的な学びをしにくい、と思われる方もいらっしゃるかもしれません。

なにしろ、今朝の聖書箇所においても、元ユダ王アハズヤの親族を皆殺しというのですから、目を覆いたくもなります。珍しくエフーが受け入れるヨナダブという人物に会い、彼の目の前で、サマリヤに残っていたアハブに属する者たちを根絶やしにしました。

一連の行動には、エフーの使命感のようなものを感じなくもありません。エリヤに与えられた預言の言葉は必ず実現しなくてはならなく、それを自分こそが成し遂げるといったものです。

これが信仰者アブラハムやモーセやダビデの行動であれば、絶えず主に求めつつ、導かれつつでありましたから、戦いがあったとしても理解できるものです。あのサムソン(士師記 14 章)以下)も、自己中心の行動も多かったのですが、最後は両目を失いながら、その怪力で建物を破壊し、自分も死に、多くのペリシテ人の命をうばいました。その時、彼は祈っています。

私たちが読んでいる記事に出て来るエフーのうちに、あるいはあったかもしれないのは、アハブの一族郎党の命を奪うことは、神の民に良きものをもたらすという考えです。しかし、使徒パウロのうちにあった「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」(ピリピ 1 章 21 節)とある覚悟とは大分落差があります。

そして、イエス・キリストはたくさんの愛のわざをしてくださった主ですが、人々を救うためになさったことは、御自分の命を十字架で投げ出すことでした。人の命を奪う方向ではなく、自分の命を差し出すことによって、救いの道を示されたのです。これはエフーが民に良きものをもたらさんとして、とった方法の正反対でありました。

私たちは、イエス・キリストのような行動をとれる者達ではありません。しかし、この方を見上げていく者たちです。そのことを覚えつつ、また一週間歩んでいきましょう。

「いさおなきわれを 血をもてあがない イエス招きたもう みもとにわれゆく」
(讚美歌 271 番 1 節)